

日本文化学科の10年

山田正浩

I その前史

わたしたちの日本文化学科が発足したのは1998(平成10)年4月であるが、そこに至るまでの道のりは長かった。わたしが県立大学に着任したのは1971年4月で、ずいぶん昔のことになるがその頃すでに、“史学科”のプランが当時の一般教育学科(組織としての正式名称は、「文学部一般教育」であった)内で議論されていた。日本文化学科の10年を語るのに、発足から30年近く遡って、ここから書き始めなければならないと思う。前任者からはその話はまったく聞いていなかったのが驚いたものであるが、当時の学内の事情を整理してみると、①'66年に県立大学が発足したが、キャンパスはそれまでの女子短大、女子大時代のものをそのまま引き継いでいて、狭隘な上に建物、施設は老朽化していた。②学部、学科の構成がバランスを欠いていた。この2つの点について学内に共通認識があったと思う。'98年まで続いた将来計画議論の基底にいつもこの2つがあった。つまり、“移転”と“拡充”である。

県立大学発足とともに文学部ができたが、その構成は、女子大時代から引き継いだ国文学科、英文学科と、児童福祉学科を二つに分けて成立した児童教育学科、社会福祉学科、それに教養科目を担当する一般教育学科から成っていた。上記、史学科プランと言うのは標準的な文学部の構成から考えて、哲学、史学の分野が欠けたままで、これを補いたい、ということなのであった。'74年に大学内の将来計画構想がまとめられた。これは総合大学風に文科系、理科系の学部名を8つ(内、夜間学部2)並べたもので、特別な理念も特色も無い平板なプラン、という印象であった。このプランは大学内にとどまり、設置者である愛知県には提出されなかった。この中で、わたしたちに関係する部分は、「文学部人文学科(定員20人)、史学科(同20人)」の名で出ている。次いで'79年、平場学長の時にも将来計画案がまとめられ、そこで

は先の2学科が、1つにまとめられて、「人文学科(同40人)」となっていた。このプランは県に提出され、学長と副知事の会談が2回持たれたが、県からの、それ以上の反応は何も無いままに終わった。こうして依然として、長い閉塞状態から脱することはできなかつたのである。

'87年、横越学長の着任後、'89年にかけて、また、学内で将来計画の議論が進められることになった。“また”、と書いたのは正直なところ、そう思ったのである。2年近くかけて議論が続いたが、それまでのものに比べてはるかに詰めた議論がされたと思う。現在の県立大学の教学の理念、学部・学科構成など、この時の議論を引き継いだ部分が少なくない。学長から示された5つの「大枠」、昼夜開講制、社会福祉の充実、情報科学教育、国際化への対応、一般教育の改革。それに伴って、外国語学部Ⅱ部、女子短期大学の廃止など。また、一般教育を全学で分担することは、これに先立つ計画以来、一貫した考え方であった。わたしたちの学科は、「歴史文化学科」の名称で文学部の新設学科に位置づけられていた。検討を重ねた将来計画案は'89年7月に学内で承認された。

同年10月に大学案が一部変更の上、県に提出されたが、その頃から、にわかには動きが慌しくなった。突然(役職を担当していない一般の教員にとっては、まさに“突然”であった)、“県大の移転・拡充が県の新規事業に入って、調査費が付く”、との報告を教授会で聞いて、「本当か?」という、かえって一種の戸惑いに似た雰囲気が一瞬教授会に流れたことを記憶している。

この後、'98年までの経過を年表風にまとめると、つぎのようになる(1998年度愛知県立大学移転拡充報告書、pp.4)。

- ・'90. 7 「県立大学整備計画検討会議」が発足(飯島宗一芸文センター総長(当時)が議長、学識経験者15名)。同年12月、「愛知県立大学整備計画に関する報告書」策定。
- ・'91. 4 県に「県立大学整備会議」と「県立大学整備会議研究会」設置。
- ・'92. 3 整備会議で、「愛知県立大学整備計画基本構想」策定。
- ・'93. 3 愛知県立大学整備基本計画」策定。教員定数の決定(県からの内示、189名)。

- ・'94以降 自治省との交渉。
- ・'95秋以降 文部省との事前相談。
- ・'98. 4 新キャンパスへの移転、開学。

この間、'94年以降、新キャンパスの整備（測量、造成、建物の建設）が並行して進められている。また、わたしたちの学科に関して、重要な変更があった。'93. 3の「基本構想」で、それまで予定していた「歴史文化学科」の名称が「日本文化学科」に改められた。学科名称の変更はカリキュラムの一部、教員配置の一部を変更せざるを得なかった。ただし、“日本史を中心にする。ただし、日本史だけにはしない”、ということは、わたしたちのグループでは早くから合意されていたことであって、学科名称の変更に関わらず、学科構想の基幹部分は維持されたと考えている。なぜ、「歴史文化学科」から「日本文化学科」に変更したか、その理由については憶測が入るのでここでは述べないが、決してわたしたちが希望し、提案したものでなかったことは明記しておく。教員定数は県から総数の内示があった後、'94年中に学内の会議で決まった。結構激しい議論があったと記憶しているが、日本文化学科には12名が割り当てられた。学生定数は当初、昼間主40、夜間主20を予定していたが、最終的に現在の昼間主30、夜間主15、の数字が確定したのは文部省との事前相談が定期的に行われるようになった後のことである。当時、“学生定員の原則抑制”という大枠がかぶせられていて、それをどうクリアするか、という細かい、うんざりするやり取りの結果であった。当初、完成年は'96年を予定していたが、基本計画では2年繰り下げられて、'98年となった。一時、さらに2年繰り下げられそうだと、という話を聞いたこともある。ともあれ、県に大学から計画が提出されてから10年を要した“大事業”であった。もちろん



写真1 完成した新キャンパスの見学に
('98年2月)

ん、わたしたちの日本文化学科はその大事業の渦の中から誕生したのである。

Ⅱ 日本文化学科のスタート

“希望に満ちて”、と平凡に書き始めたいところであるが、“希望”と“一抹の不安”、両方が入り混じった感じで、というのが当時のわたしの正直な実感であったと思う、それまでがあまりに長く、紆余曲折があったから……。

ここに'98年4月、新学科スタートに当たって新入生諸君のためのガイダンスに合わせて急いで作った手製の、「日本文化学科——履修の手引き——」があって、今、それを読み直している。日本文化学科設置のために文部省に提出した、「日本文化学科設置届出書」の内容の一部を学生諸君のためにアレンジしたものであるが、現在の、「日本文化学科の栞」に引き継がれている冊子である。学科設置の趣旨、研究・教育の目的、どのような人材を育成するか、東海地域との関わり、留学生の受け入れ、就職の見通し、取得できる免許・資格、とやや硬めの説明が続いている。



写真2 第1期生の入学式
('98年4月)

その前のページを見ると、入学した学生諸君に対して、学科で学ぶべき内容が4つに分けて図示されている。①日本文化学への関心、②日本列島の歴史理解、③地域研究の追及、④異地域との文化比較、と。「手引き」の後の方では、これに対応する具体的な4つの履修モデルが示されている。

これらを見ると、日本文化学科の研究、教育上の構成が複合的であり、それに対応してカリキュラムもまた複合的であることが容易に理解される。これがわたしたちの日本文化学科の特徴の1つである。日本の大学で、新しい時期に作られた学部、学科にはこのような複合的な内容を持つものが少なくない。このような特徴は教員にとっても、また学生諸君にとってもメリットであり、デメリットでもある。ゼミ研究や卒業論文のテーマは相当自由に選べるし、場合によっては途中からの変更も可能であろう。逆に、焦点が絞り込めないと、いったい何を勉強したのか、ということになりかねない。社会や受験生に対しても、複合的と言うことは、判りにくさでもある。“県大の日本文化学科”はこういう内容を持っている、と具体的に説明することを怠ってはいけないと思う。ちょうど県大の改組が進んでいた頃は(今また、そうであるが)、日本中の大学が、改組、改革、であった。国文学科が日本文化学科と改称する、英文学科が国際文化学科と改称する、ということが流行った時期で、“日本文化学科”といっても、その中身までよく理解してもらう必要がある。ましてや、県大には国文学科もあるのだから。

またこの時期、国立大学を中心に教養部の改組が進んでいた時期でもあった。当然、さまざまな専門分野の教員グループを1つの理念による研究教育組織にまとめるのであるから、困難が伴う。多くの専門分野を横に並べた網羅的ではあるが、平板な組織になりがちである。わたしたちの学科立ち上げも、その経緯から教養部改組の流れに準じるものといってよかろう。曲折を経て、1つの専門学科が成立したのであるが、それを可能にした学内の要因を2つ挙げておこう。1つは、先に述べたように、早い時期の将来計画から一般教育は全学的に分担し、そのための学科組織は置かない、というコンセンサスができていたこと。これは'74年の将来計画案から変わらない方針であった。2つめは、一般教育学科といっても語学担当教員は初めから専門学科に所属していたこと、保健体育分野は児童教育学科に受け皿があったこと、など新しく専門学科に作り変える際に分野を限定しやすかったこと、である。一般教育学科教員の中でもっとも処遇が難しかったのが自然系の教員であったが、新設される情報科学部の地域情報科学科に入ることになった。残る人文、社会系教員の多くがわたしたちの学科発足時の中心メンバーになったの

である。ただし、学科発足前から新学科のプランを念頭に入れて採用人事を行ってはいた。

発足当時の教員スタッフ、およびその後の異動は表1の通りである。古川先生、米家先生は発足時からのスタッフであったが、新設学科の教員は年次計画で順次充足することになってきたため、実際には

99年着任、となった。初年度の入学志願者数は昼間主、109名、夜間主、37名、倍率は昼間主、3.6倍、夜間主、2.5倍であり、入学者数は昼間主、37名、夜間主、17名であった。これ以外に2年後、3年次編入学生、昼間主、5名、夜間主、3名が加わった。わたしは初年度の倍率が5倍程度となることを内心、期待していた。それよりやや低めの倍率であったので、少し残念な気持ちがあったことを記憶している。次年度以降は、ほぼ、期待した倍率で推移している。

発足時から学科の行事として定着し現在まで続いているのが、「新入生歓迎旅行」である。第1回の“新歓旅行”は、先述の学科設立の趣旨、目的の中にある、

表1 日本文化学科の教員

| (発足時) | | 氏名 | 専門分野 | 在職期間 |
|-------|----|----|------------|-------------|
| 石川 | 清之 | | 日本経済史、近現代史 | ～'06.2 |
| 稲村 | 哲也 | | 文化人類学 | ～ |
| 梅村 | 喬 | | 日本古代史 | ～'99.3 |
| 大塚 | 英二 | | 日本近世史、地方史 | ～ |
| 上川 | 通夫 | | 日本中世史 | ～ |
| 河原 | 由雄 | | 日本美術史 | ～'02.3 |
| 國分 | 典子 | | 比較憲法 | ～'05.8 |
| 米家 | 泰作 | | 歴史地理学 | '99.4～'03.9 |
| 近藤 | 譲治 | | 社会思想史 | ～ |
| 樋口 | 浩造 | | 日本思想史 | ～ |
| 古川 | 彰 | | 民俗学、環境社会学 | '99.4～'01.3 |
| 山田 | 正浩 | | 人文地理学、韓国研究 | ～ |

(その後の異動)

| 氏名 | 専門分野 | 在職期間 |
|-------|----------|-------------|
| 丸山裕美子 | 日本古代史 | '99.4～ |
| 小池 淳一 | 民俗学 | '01.4～'03.3 |
| 井戸 聡 | 環境社会学 | '03.4～ |
| 山村 亜希 | 歴史地理学 | '03.10～ |
| 川畑 博昭 | 法学(比較憲法) | '05.10～ |
| 與那覇 潤 | 日本近・現代史 | '07.10～ |



写真3 新入生歓迎旅行 御母衣ダムサイトにて ('00年5月)

「東海地方との関わり」を意識して、“環伊勢湾”をテーマにしてコースが決められた。梅村先生の発案であった。その後のコース選定は、“山”、“海”を繰り返して、在学生も一緒に参加するスタイルで現在に至っている。学科が求心力を持つことは大切なことである、と思っている。その意味で、この行事が続いていってほしいと思う。

学科教員の研究会もスタートした。これも教員の研究面に、分野の異なる教員が集まって、情報、意見の交換を通して、相互に啓発する、という趣旨であった。残念ながらこちらは数年続いた後、中断してしまった。今年になって、再度復活したことは大変うれしい。

発足時のカリキュラムは数年後、一度検討が加えられて、ややスリムになって現在に至っている。河原先生の退職後、後任が不補充になった時だと記憶する。

Ⅲ その後の日本文化学科

発足後10年間の教員の異動をもう一度表1に戻って見ると、10年経つと、すでに何人もの先生の交代があった、と今さらのように思う。河原先生は学科設立に当たって中心科目である日本文化学、日本文化史担当のために赴任していただいた。4年後の学科完成時

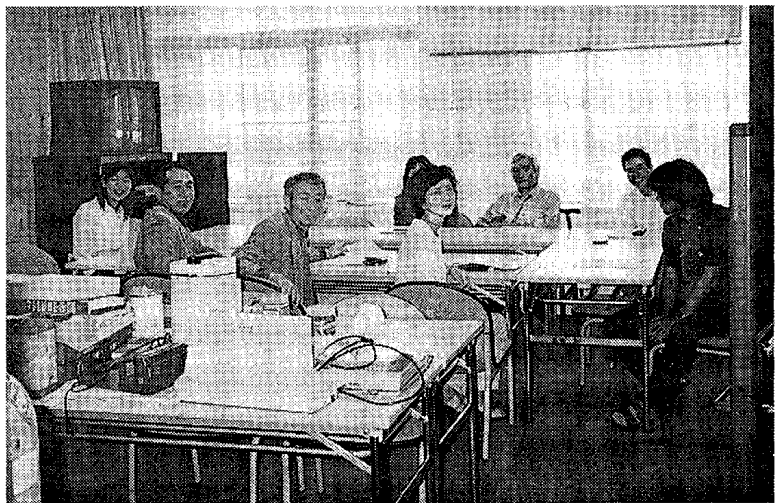


写真4 学科会議終了後
(山村先生着任直後か)

まで在任され、その後も数年間、非常勤講師として授業を担当していただいた。梅村先生の後任が丸山先生、古川、小池両先生の後任が井戸先生、米家先生の後任が山村先生、國分先生の後任が川畑先生である。石川先生は定年を前にして亡くなられ、その後任は教員の定数削減計画との関連で、ただちに補充できなかったが、'07年10月、ようやく與那覇先生を迎えることができ

表2 日本文化学科 志願者数と入学者数(入試広報室提供の資料により作成)

A) 総数(定員 昼30 夜15)

| 年 度 | | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 昼間主 コース | 志願者数 | 109 | 131 | 162 | 144 | 156 | 148 | 134 | 143 | 154 | 129 |
| | 入学者数 | 37 | 35 | 31 | 37 | 30 | 36 | 33 | 33 | 36 | 32 |
| | 倍率 | 3.6 | 4.4 | 5.4 | 4.8 | 5.2 | 4.9 | 4.5 | 4.8 | 5.1 | 4.3 |
| 夜間主 コース | 志願者数 | 37 | 102 | 81 | 83 | 79 | 100 | 120 | 90 | 89 | 88 |
| | 入学者数 | 17 | 15 | 17 | 15 | 14 | 16 | 18 | 17 | 15 | 17 |
| | 倍率 | 2.5 | 6.8 | 6.1 | 5.5 | 5.3 | 6.7 | 8.0 | 6.0 | 5.9 | 5.9 |
| 合計 | 志願者数 | 146 | 233 | 243 | 227 | 235 | 248 | 254 | 233 | 243 | 216 |
| | 入学者数 | 54 | 50 | 48 | 52 | 44 | 52 | 51 | 50 | 51 | 49 |
| | 倍率 | 2.7 | 4.7 | 5.1 | 4.4 | 5.3 | 4.8 | 5.0 | 4.7 | 4.8 | 4.4 |

B) 一般選抜

| 年 度 | | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|--------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 昼間主 コース (前期) | 志願者数 | 81 | 69 | 75 | 77 | 84 | 71 | 65 | 59 | 81 | 71 |
| | 入学者数 | 30 | 23 | 21 | 24 | 17 | 24 | 24 | 24 | 22 | 25 |
| | 倍率 | 2.7 | 3.0 | 3.6 | 3.2 | 4.9 | 3.0 | 2.7 | 2.5 | 3.7 | 2.8 |
| 昼間主 コース (後期) | 志願者数 | | 41 | 57 | 34 | 50 | 52 | 34 | 48 | 44 | 32 |
| | 入学者数 | | 3 | 3 | 6 | 8 | 4 | 2 | 3 | 4 | 2 |
| 夜間主 コース (前期) | 志願者数 | 28 | 38 | 32 | 26 | 25 | 34 | 51 | 33 | 35 | 52 |
| | 入学者数 | 12 | 6 | 5 | 6 | 4 | 9 | 8 | 10 | 9 | 12 |
| | 倍率 | | | | | | | | | | |
| 夜間主 コース (後期) | 志願者数 | | 53 | 37 | 36 | 39 | 57 | 53 | 46 | 35 | 27 |
| | 入学者数 | | 3 | 3 | 2 | 3 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 |

(98年度については、前期、後期の志願者数、入学者数を合わせて、前期欄に示した)

C) 昼間主コース 推薦(定員5)

| 年 度 | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 志願者数 | 20 | 17 | 27 | 26 | 18 | 17 | 23 | 23 | 21 | 19 |
| 入学者数 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |

D) 社会人(定員 昼若干名)

(定員 夜 01年度まで A 4、B 4 02~06年度 A 4、B 3 07年度 2)

| 年 度 | | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|-------------------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 昼間主 コース | 志願者数 | 2 | 2 | 0 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| | 入学者数 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 夜間主 コース (A) | 志願者数 | 7 | 6 | 6 | 8 | 5 | 0 | 5 | 9 | 3 | 8 |
| | 入学者数 | 4 | 3 | 1 | 3 | 3 | 0 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| 夜間主 コース (B) | 志願者数 | 1 | 5 | 6 | 13 | 10 | 9 | 11 | 8 | 16 | |
| | 入学者数 | 1 | 3 | 1 | 4 | 4 | 4 | 6 | 3 | 3 | |

(07年度以降、夜間主コースのA、Bの区分が無くなったので、A欄に示した))

E) 昼間主コース 外国人留学生 (定員 若干名)

| 年 度 | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 志願者数 | 5 | 2 | 2 | 6 | 3 | 7 | 10 | 12 | 7 | 7 |
| 入学者数 | 1 | 2 | 1 | 2 | 0 | 3 | 2 | 1 | 4 | 0 |

F) 3年次 編入学 (定員 昼 5 夜 3)

| 年 度 | | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 |
|-----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 昼間主 | 志願者数 | 7 | 7 | 6 | 12 | 7 | 13 | 8 | 10 |
| コース | 入学者数 | 5 | 3 | 3 | 6 | 4 | 3 | 5 | 5 |
| 夜間主 | 志願者数 | 8 | 4 | 4 | 3 | 4 | 5 | 2 | 4 |
| コース | 入学者数 | 3 | 3 | 1 | 2 | 3 | 3 | 2 | 1 |

た。河原先生の後任は補充できなかつたため、現在のスタッフは11名である。

各年の入学の状況を見てみよう。各種の選抜方法（一般選抜前期・後期、推薦、社会人、帰国子女、中国引揚者子女、外国人留学生、編入学）を合わせて、'98年度以降の日本文化学科の志願者数、入学者数、倍率の推移を整理すると、表2の通りである。初年度は先述のように、やや少ない志願者数であつたが、次年度以降は

昼間主が倍率で5倍程度、夜間主が6倍程度で推移している。県大では考えられる入試方法はすべて実施しているといつてよいほどで、まさに、“入試のデパート”である。志願者数の推移を見ると、'99年度以降、昼間主コース志願者は130～



写真5 教養演習で海上の森見学 三角点を囲んで ('05年5月)

160人の間を推移している。夜間主コースの志願者は80～100人程度である。入学試験のメイン部分である、昼間主の一般選抜前期だけを取り出してみると、志願者は、70～80名程度、倍率は3倍程度、と言えよう。'04、'05年の志願者がやや少なかつた。'06、'07年は旧に戻つたと考えられるが'08年度の志願者数に注目したい。できれば、少なくとも、3倍程度の倍率は維持したいものである。年ごとの志願者の増減に一喜一憂する必要はまったくないが、

減少傾向が数年継続すると注意すべきだ、と思う。

昼間主コースの推薦入試は、定員5名に対して毎年20人前後の志願者があり、制度として、また外部からの評価も定着していると思う。合格後、それを辞退した例もない。推薦入試について、廃止しては？、との意見を聞いた記憶があるが、わたしは残すべきであると考えている。視点を変えて今、外を見渡すと、すでに“志願者全入”の時代に入っている。県大の今後を考えて、そのようなことはまったく想定したくないが、入学定員の確保のために推薦入学枠を拡大する大学が増加しているようである。少し前の新聞に、入学定員数に対する推薦入学枠の比率を制限するべきだ、との議論が文部科学省内にある、との報道が出ていた。このような事態も一応、頭のどこかには置いておいて、定着したこの制度は維持すべきだと思うのである。社会人の入学志願者は、残念ながら明らかに減少している。とくに昼間主コースにおいてその傾向がいちじるしい。夜間主コースにおいても、定員枠を減らし、さらに'07年度からは、A、Bの区別もなくした。編入学制度も大学全体を見ると志願者の減少が明らかで、'08年度から廃止することが決まっている。日本文化学科について見ると、他学部、他学科に比べて志願者数は少なくないものの、試験の結果、合格者が定員を満たすかどうか、という現状であろうか。社会人、編入学ともに問題点はあるが、制度としては残すべきものであると、今でもわたしは考えてる。この2つの選抜方法は現役の高校生を対象とする



写真6 留学生諸君とバーベキューを食べに
愛知牧場（'06年11月）

ものではないので、広報の方法に工夫が必要であろう。もう一度、これらの選抜方法の原点に戻って、外にアピールすべき、と思う。外国人留学生の日本文化学科への志願状況は期待した通りであると思う。定員枠を設定していないこと、合格しても入学手続きを取らない場合があることなど、問題点はあるが、わたし

たちの学科が持つ特徴、意義を考えて充実させることを検討すべきではなからうか。教員にとって、また、職員にとって負担と責任は大きくなるのではあるが。入学した後の支援の策も合わせて、大学として考えるべきことが多い。

第1期生の諸君が3年生に進むようになって、学生時代の後半をどう指導すべきか、の検討が学科内で始まった。主として、3、4年次の履修の中心となる演習をどう履修させるべきか、卒業論文の指導をどうすべきか、であったと思う。3年次



写真7 卒業証書の授与式（'06年3月）

の演習は2以上を履修できるようにする、逆に3、4年次ともに同じ教員の演習を履修した場合(教員の立場からそれが望ましい、という意見があった)、それを卒業時の修得単位として保障する、4年次の6月末までに学科に卒業論文の題目を提出する、9月末、ないし10月初めに卒業論文中間発表会を行う、卒業論文は本文、16,000字以上とする、卒業論文の口頭諮問は主査と副査、2名の教員で行う、などが決められ、大きな変更もなく、今に至っている。

第1期生の諸君がいよいよ卒業論文を書く時になった。6月に提出された論文の予定題目を見て、非常に驚いた。思っていたよりもはるかに多様な、ユニークな題が並んでいて、一体誰が指導するのか、と思った。はからずも、先に書いた、学科の持っている、“複合的特徴”、ということについて、学生諸君が持っている関心の多様さについて思い知らされたものであ

表3 日本文化学科 卒業論文のテーマ

| | 03年 | 06年 |
|---------------------|-----|-----|
| 日本史関係 | 9 | 8 |
| 古代 | 7 | 8 |
| 中世 | 4 | 9 |
| 近世(歴史地理を含む) | 3 | 3 |
| 小計 | 23 | 28 |
| 文化人類学関係 | 8 | 7 |
| (外国研究、外国から見た日本、を含む) | | |
| 現在の日本の社会、文化、風俗、産業 | 8 | 15 |
| 民俗学関係、伝統芸能、伝統文化 | 6 | 3 |
| 思想、思想史 | 3 | 2 |
| 小計 | 25 | 27 |
| 合計 | 48 | 55 |

る。'03年と'06年の卒業論文のテーマをわたしのまったくの独断で整理したものが表3である。無理に分類した部分があるので、この数字にはあまりこだわらないでいただきたい。表にしてしまうと先に述べた、多様性、ユニークさは、まったく現れてこない。個々の題目を例示したいところであるが、それも適当ではないであろう。各時代を通しての日本史に関係するテーマがほぼ半分、後の半分は文化人類学、外国研究、思想・思想史、現在の日本の社会、文化、風俗、生産活動、伝統文化、民俗学など、簡単には分類できないような多様なテーマが占めている。

卒業時の就職状況を整理したのが表4である。'01年以降の卒業生のうち、就職希望者に対する採用内定者の比率を日本文化学科分と文学部の平均値を合わせて示した。わたしたちの学科から卒業生を送り出すようになった時期は、残念ながら不況の時期であり、それはその後も数年間続いた。各年の卒業生の採用内定率は残念ながら100%とは言えない。

80%を下回る年が2回あった('01年、'03年度)が、ここ数年は90%を越える年が多くなった。わたしのゼミの卒業生諸君の中にも、とうとう卒業までに内定を取れなかった人、卒業してから就職先が決まって、それをメールで知らせてくれた人、といろいろあった。ここ数年は景気の回復状況に対応して、内定率は上昇している。わたしのゼミの学生諸君を例にすると、今年就職内定が一番早かったと思う。これまでの内定率を見ると、文学部の平均値に比べてわずかではあるが上回る年が多いといえよう。

ただし、この表の数字を判断する場合、いくつか、留意すべき点がある。

表4 日本文化学科 卒業者の就職状況
(学務課提供の資料により作成)

A) 昼間主コース

| 年 度 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 |
|--------------|------|------|------|------|------|------|
| 卒業生数 | 38 | 31 | 36 | 38 | 39 | 34 |
| 就職希望者数 | 28 | 16 | 22 | 24 | 29 | 27 |
| 内定者数 | 22 | 14 | 17 | 22 | 28 | 24 |
| 内定率% (学科) | 78.6 | 87.5 | 77.3 | 91.7 | 96.6 | 88.9 |
| 内定率% (学部) | 88.4 | 88.5 | 85.0 | 91.6 | 92.1 | 87.5 |

B) 夜間主コース

| 年 度 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 |
|--------------|------|------|-------|-------|------|------|
| 卒業生数 | 15 | 16 | 15 | 19 | 13 | 18 |
| 就職希望者数 | 8 | 8 | 5 | 11 | 5 | 13 |
| 内定者数 | 4 | 5 | 5 | 11 | 4 | 11 |
| 内定率% (学科) | 50.0 | 62.5 | 100.0 | 100.0 | 80.0 | 84.6 |
| 内定率% (学部) | 82.1 | 82.8 | 89.5 | 93.0 | 91.1 | 91.1 |

採用内定は学生から大学事務への報告によっているもので、学生諸君からの報告漏れが年によって、あるいは学科によって何例も出る場合があること、公務員関係を中心に、正式内定が年度末になることが少なくないこと、など。これが内定率の数値に影響する場合がある。第1期生の諸君が卒業する時のことではなかったかと記憶するが、年度末の最後の委員会で見た日本文化学科の内定率が、その前の会議に出ていた数値より低くなっていて面食らったことがあった。前の会議の数値は公務員関係の内定を見込みで入れていたというのである。最後の会議の時、まだ内定が出ていないので除外したという事情であった。

さらに、就職ということ考える場合、学生諸君の就職に対する考え方が、わたしの若い頃に比べて非常に変わってしまったことを考慮する必要がある。数は多くは無いが、積極的に、“わたしは就職しない”、と考えている学生諸君がいること。それより多いのは、“正規採用はいやだ、だから、フリーターかアルバイトを希望する”、といったケースも増えていると思う。さらに、いったん就職した後、転職するケースが増えている。関係の委員会で、「これまでのような型に決まったやり方で内定率をはじき出すだけではなく、学生の就職に対する意識を調査してみる、フリーターやアルバイトなどをどう扱うのか、年度当初の就職希望者が、年度を通した就職活動の結果、就職希望者数がどう変わるのか、といった細かい調査と議論が必要ではないか」と発言した記憶がある。

IV これからの日本文化学科

日本文化学科が生まれて10年経った今、また県大は大きな変化の時代を迎えようとしている。今年の4月から“法人化”がスタートしたが、2009年度からまた大学、学部、学科の再編が実施される。書くまでもないが、これまでにほぼ固まった再編計画は、看護大学と一緒に新しい、“愛知県立大学”になること、現在の文学部のうち、児童教育学科と社会福祉学科は別の学部になり、英文学科は外国語学部英米学科と一緒に外国語学部の1学科となること、国文学科と日本文化学科で1学部を作り、日本文化学部となること、日本文化学科は歴史文化学科と名称を変えること、などである。それ

に、夜間主コースの廃止。

新しいコース、新しいカリキュラムも固まりつつあって、新しい学科に向かって、もう動き始めている。

これからのことを考えて、わたしが希望することを箇条書きで述べたいと思う。

①名前を変える国語国文学科と2学科で学部を構成するが、協力して“学部”としての研究活動、教育活動を活発化させていただきたい。ただ一方で、規模が小さくなるのが、学部運営の点で気がかりではある。教員の負担が大きくなることは明らかであるから。

②教員の研究会が復活したことは先に述べたが、教員だけにとどまらず、大学院生、学部学生、卒業生までを含めた将来への活動プランが視野に入っている、と理解している。研究活動の活発化のため、また、外への学科アピールの基盤として、その発展を非常に期待している。

③自己点検、自己評価ということが言われるが、学生諸君への教育面での学科としてそれが必要だと思う。そのための継続的なデータの蓄積が必要になる。

④卒業生の組織ができないものであろうか。教員側、卒業生側、双方で相当のエネルギーを必要とすることではあるが……。学科の存在を強くする1つの要素にもなりうる。国文学科から何か頂けるノウハウはないものであろうか。

⑤学科というより、今後は学部として、外国人留学生の受け入れ、指導、支援、ということをはっきりとした目標に入れていただきたい。学部の存在をアピールする1つの要素になりうる。これまで、この分野は担当する個人に任されていた側面が強い。大学としても、もっと積極的に関与すべき点が多いとも考える。

V おわりに

わたしに、だけではないのであるが、すでに何人もの卒業生諸君から、「日文がなくなるのか?」、「夜間主がなくなるのは寂しい、残念だ。けしからん。」という声が聞こえてきた。そのたびに、「名前は変わるけど、変わらな

いよ」と、言っている。名前が変わる以上、変わる場所は変わる。しかし、今の学科立ち上げの過程を思い出すと、今回とは逆に、「歴史文化学科」が「日本文化学科」に変わった。その時も学科構想の基本部分は変わらなかったと思っている。今回も同じである。変えなくてはいけないことは変えるべきであるし、変えてはいけないことは維持しなければならない。卒業生の諸君は、自分たちが所属した学科は続く、と確信してほしいし、引き続き支援していただきたい。